

1月～2月にかけての訪問を終えてのおたより No11 です。

【叶業務マニュアル作成に向けて】

ここ3回の研修では、業務マニュアルの作成を進めています。

- ① 1回目では、マニュアル作成の必要性について解説をしました。
- ② そして、2回目で「集団療育」のマニュアルを3人の常勤職員さんと一緒に作りかけました。
- ③ 3回目で、最終的にみなさんで協議しながら、ある程度の完成形に近づけたのでした。

このようなパターンでマニュアル作りを進めてきています。今後は、役割分担をして、各職員ごとに他の内容のマニュアル作成に進んでいきます。

さて、なぜ、いま、マニュアル作成なのでしょう？

これには、2つの大きな理由があります。

① 業務の整理・見直し・改善

叶は、新規に運営を開始してから、おおよそ1年が経とうとしています。さまざまなことを試行錯誤しながら取り組んできた今、これまでの業務を振り返り、再確認したり、整理したり、不十分なところを補ったりするよい機会なのです。このことにより、これまでの自分たちの業務を見直し、改善していくことができます。

② 新たな職員への引継ぎ

今後、望むと望まないに関わらず、必ず新たな職員がチームとして関わることが想定されます。そのとき、業務ごとのマニュアルがあると、この新たな職員が、何をどのようにすればよいのかをすぐに把握することができます。このことによって、叶を利用する子どもたちへの支援について統一が図られ、ある一定水準の支援の質の担保ができるのです。もし、新たに業務に従事する職員に対し、先輩職員が「叶ではこうやるんですよ」という指導をする際、職員によって言うことが違えば、少しでも早く業務を覚えることを邪魔することになります。これに対し、すべての先輩職員がマニュアルに沿って同じことを指導するならば、意欲満々の新職員はきっと安心して持ち前の能力を発揮し、早い時点で叶の大きな戦力となることと思います。

このようなことを意識しながら、マニュアル作成の具体的な手順について次の3点を確認しました。

- ① これまでやってきたこと、今やっていることを一通り書き出す
- ② よりよい支援を目指すため、不十分なところを補って新たに作ったり詳しくしたりする
- ③ 想定される事態（リスク）が起きた場合の対処支援を書き加える

これまでの3回の研修で、すべてのスタッフさんが、一度は、私と一緒に具体的なマニュアル作成作業に取り組みました。そこで、これから先は、上記の手順を踏まえながら、各スタッフさんが役割分担して個別にマニュアル作成を進め、場合によっては、他のスタッフさんに相談したり、数人で検討・協議したりしながらマニュアル（案）の完成を目指します。

そして、叶の現場スタッフでよく吟味した案をわたしに提出してもらい、微調整をしたあと、管理者の松尾さんに提出して最終GOサインをもらうという段取りになります。

4月からのマニュアル完全実施を目指すためにも、3月の中旬には、案の作成作業を終えなければなりません。自宅での宿題とかではなく、業務中での個人作成作業と複数スタッフでの検討作業をするための計画的な時間ねん出を心がけてください。

【療育活動の事前ミーティングと事後ふりかえりについて】

しばらく、私が実際の療育活動に参加することができない時期がしばらく続いていましたが、ここ3回ほど連続して最後まで療育活動に参加させていただきました。

その中で、印象に残った大きな点は、

全体の活動の流れが安定していて子どもたちが、その流れにしっかり参加できていること

でした。このことは、地道に、丁寧に、一つ一つの療育活動（個別学習やおやつ、集団療育活動や帰りの会などなど）を積み重ねてきたスタッフの努力の賜物だと感じます。ぜひ、この一つ一つの療育活動を大切に扱う姿勢を今後も継続していただきたいと切に願います。

そのために、毎日の事前ミーティングと事後の振り返りについて、ポイントを絞ったミーティングの進め方を体感してもらうため、私が進行役を務め、提案させていただきました。

1 平日 13 時からの事前ミーティングについて

- ① その日のPLが、事前に療育計画を提出して管理者の松尾さんと協議した、もしくは、助言を得た内容を伝え、その日のスタッフ間で共有する

- ② 通常とは違う部分の「その日の配慮点」のみを共通確認する（利用児の変更や送迎の変更等については事前に計画に変更を反映させておき、改めての確認等はしない）
 - ※ とくにどの部分を大切にするのか、その日のスタッフ全員がしっかり共通確認しておくことが大切です。このような意味から、2月24日のPL野田さんが提出した療育計画のサーキットのねらいはたいへん素晴らしい記述ぶりでした。子どもたちが、どのようになれば「できた」と判断するのか、その基準が明確に示されていたからです。これを共通確認された他のスタッフは、子どもたちへの関りが具体的でたいへん明確になります。と同時に、実際に目指す姿に到達したのかどうか確実にわかるので、事後の振り返りもポイントを絞って協議ができます！

- ③ 「配慮点」を確認したら、それを実現、もしくは実現により近づけるための**方法案（具体的な支援案）**を必ず確認しておく。
 - ※ どんなにすばらしいねらいを設定していたとしても、そこに近づくための方法がなければ、目的を達成することができません。仮にその方法でよいのかがわからない状態であっても、方法案をしっかりミーティングで共有し取り組みを明確にしておくことが大切です。そして、その方

法の効果があったのかなかったのかについて、10分振り返りで評価すればよいのです。

2 19時前の10分間振り返りについて

- ① 19時10分前までに、PLが振り返り点をまとめておく。
まとめておくポイントは、**事前ミーティングで確認したポイント**だけです！その他のポイントをどうしてもその日に協議したい場合は、事前に管理者の了承を得てください。
- ② 19時10分前になったら、全員そろっていなくてもふりかえりを始める
まずは、PLが事前にまとめていたポイントを簡潔に話す。（3分以内）
- ③ ポイントについて、質問や意見があればスタッフから出し合って協議する。（7分）
※ この際、スタッフ全員で意識してほしいことは、「こうだった」「ああだった」という**事実のみの報告は極力避け**、「だから次からはこうするとよい」「こうしてみたい」という**改善案を必ずセットで発言**することです。子どもの気になる様子等について検討する内容などは、別の会議の議題に持ち越すこととし、その日の振り返りでは、その日の**事前ミーティングで確認していたポイントのみ**に限定することが重要です。
- ④ 最後に管理者の松尾さんからひとこと総括を話してもらって終了→すみやかに退社する

ここで、PLさんがんばってほしいことは、ミーティングや振り返りで「**時間**」を意識してほしいということです。**事前ミーティングは30分**（この日の私は延びてしまっちゃいましたが…）、**振り返りは10分**を意識することで、「事前に大事なポイントを絞っておく」という脳内作業が発生し、脳が鍛えられるからです。（ここが大事！）人間は、一度に、同時にやれることに限界があります。すべてに意識を向けて一つ一つが薄っぺらくなるより、数量限定で注意を集中してその部分の脳内作業を鍛えていくことが重要です。併せて、時間を意識することで、「**業務の効率化**」を考えるようになります。「**いま、ここでこれとあれをやっておけば、時間が有効に稼げる！**」という感覚をぜひ強めてほしいと思います。

【集団療育でねらう内容について】

さて、番外編になりますが、療育の全体像を見せていただいた印象から2点お伝えしたいことが浮かんできました。

① 集団療育計画の中の①導入（活動への促し）と②はじめのあいさつの部分について

計画作成の時、PLのみなさんはどのようなことを考えて作成されていますか？

例えばサーキットであれば、その日のサーキットに対し、いかに子どもたちの意識を向けさせるかの工夫・ノウハウが詰まってないといけないと思うのですが、実際はどうでしょうか？…

もし、自分がサーキットに参加する側になったと想定した際、PLのこのオリエンテーション（導入）で、「よ～し、やるぞ～」というモチベーションが湧いているのでしょうか？…

そもそも、人は、どのようなとき動き出す（行動する）のでしょうか？

目の前に「活動」があれば、だれもが生き生きと活動するのでしょうか？そんなことはありません！
なにか行動を引っ張ってくれる「動機付け」が必要です。以下に、ある資料からの抜粋を提示します

ので、叶のさまざまな活動を促す際の工夫や声かけの参考にご検討ください。

【動機づけとは】 (<http://kagaku-jiten.com/social-psychology/individual/motivation.html>)

人がなぜそのような行動をとったかを分析することは、心理学において中心的なテーマであり、その過程としてまず最初に行動の動機づけが考えられる。動機づけとは、行動を発現し維持することで、一定の方向へと導いていく過程を表すものである。

動機づけは大きく分けると動因と誘因がある。動因とは人の内部にある要因によって行動が引き起こされるもので、欲求や要求とも呼ばれる。動因の中でも生存に不可欠な食事や睡眠、排泄などは生理的欲求と呼ばれる。

誘因とは外部からの要因によって行動が引き起こされるもので、このとき動因がそれほど強くなくても行動は引き起こされる。例えば、食欲が満たされているにもかかわらず、食後にデザートを見せられると食べたくなるのも誘因の1つといえる。

【社会的動機】

アメリカの心理学者 H.A. マレーは、人間の行動を欲求—圧力という動機づけの過程によって説明することを考えた。マレーは、生存に不可欠な生理的欲求を一次的欲求（臓器発生的欲求）とし、社会生活を営む上で必要な社会的動機を二次的欲求（心理発生的欲求）として分類した。

また、マレーは二次的欲求である社会的動機を細かく分類し、下記のような動機リストを作成している。

「社会心理学へのアプローチ | 北樹出版」マレーの社会的動機リストより抜粋

- 遊戯動機**…楽しさや面白さを求める。緊張をやわらげ、冗談やゲームを好む。
- 理解動機**…理論的な考えを求めたり、物事の仕組みを理解しようとする。
- 変化動機**…新しいことを好み、流行に敏感で変革を求める。
- 秩序動機**…安定、秩序、伝統、などを大切にする。整理、整頓、正確さを目指す。
- 達成動機**…努力して高い目標をやり遂げる。才能を生かし自尊心を高める。
- 親和動機**…好きな人の近くにいたい、助け合いたいと思う動機。友情を重視する。
- 屈辱動機**…自分を責め、非難や罰を受け入れたいと思う。敗北を認める。
- 攻撃動機**…言葉や力を使って相手を屈服させたい、反対を克服したいと思う。
- 自律動機**…束縛、強制、横暴な権威、因習を嫌い、自由と独立を求める。
- 支配動機**…人の上に立ちたい、説得や命令によって人に影響を与えたいと思う。
- 服従動機**…優れた人の命令に従い、その人の言う通りにしたいと望む。
- 顕示動機**…目立ちたい、人を驚かせたり、楽しませたりして印象づけたいと思う。
- 援助動機**…弱い者、困っている者などを助け、慰め、励ましたいと思う。
- 依存動機**…甘えたい、助けてもらいたい、愛されたい、同情されたいと思う。

異性愛動機…異性を求め、恋愛関係や性的関係に関心を向ける。

屈辱回避動機…失敗して軽蔑されることを避けたいと思う。自己防衛的な思い。

【マズローの欲求階層説】

動機づけにおいて、欲求の種類や誰もが共通に持つ欲求とはなにかという問題は重要である。マズローは5つの基本的欲求が階層を構成しているという欲求階層説を提案した。これは自己実現理論とも呼ばれている。

- 1 生理的欲求…食事や睡眠、排泄などの生命活動を維持するために必要な欲求
- 2 安全・安定の欲求…身体的・精神的安全性や経済的安定性の欲求
- 3 所属と愛情の欲求…集団に所属したいという社会的欲求
- 4 承認欲求…他人から高い評価を得たい、自尊心を満たしたいという欲求
- 5 自己実現欲求…自分の能力を最大限に引き出したい、知識を得たい、知りたいという成長欲求

1の生理的欲求が最も低次の階層であり、5に近づくにつれ高次の階層となる。欲求階層説では、低次階層にある欲求が満たされると、より高次の欲求が出現するという構造になっている。

1～4の欲求は欠乏欲求と呼ばれ、満たされる度合いが少ないほど強くなり、満たされると減少する。5の自己実現欲求は成長欲求と呼ばれ、欠乏欲求が満たされると現れる。

低次の欲求ほど誰もが共通にもっている基本的欲求であり、高次の欲求ほど個人的なものとなる。

マズローによると、自己実現を達成した人々は高度に成熟し、動機や認知のあり方が平均的な人々とは異なるとしており、以下の様な特徴を挙げている。

現実をより有効にとらえ、快適な関係を保つ

自分や他者を受容できる

自発的である

自己中心的ではなく課題中心的である

ユーモアのセンスがある

創造的である

文化と環境からは独立的であり、文化に組み込まれることに対し抵抗をもっている

対人関係において心が広くて深い

ものごとを客観的にとらえ、深い理解をもつことができる

マズローは晩年、この5つの欲求の他に自己超越の段階があることを発表している。自己超越の段階では、純粹に目的の達成だけを求め、見返りなどを求めず自我を忘れて没頭するというような領域である。

② 集団療育の目標（ねらい）について

サーキットの部分って「**集団療育**」の扱いですよね？

見せていただいた療育は、ねらいが「**体の動き**」になっていました。これはこれで目標としてはちゃんと成立しているので、だめということは全くありませんが、今後、叶の2本柱の一つである「**集**

「**集団療育**」を意識した活動にする場合の目標のヒントとなる資料をご提案します。

学校の学習に**特別活動**という教育内容があります。この特別活動は、「**集団活動**」を通して児童生徒を育成するというねらいをもった学習であり、その内容や指導方法は参考になるものと思われます。もちろん、学校の先生方と情報共有したり協議したりする際に、知識として持っておくと、一目おかれるかもです(^^)／

【望ましい人間関係の条件】

江川びん成氏（東京学芸大学教授）は、望ましい人間関係について「相互理解」「相互尊重」「相互信頼」「相互援助」「協力」「切磋琢磨」「公正な競争」の7つの条件が満たされた時と述べている。

| | |
|--------------|--|
| 相互理解 | 相手に関する様々なことを知る。相手からよせられる期待や要求などの気持ちを察知する |
| 相互尊重 | 長所・個性や自由を認める。約束を果たす。嫌がることを言わないなど相手の存在自体を無条件に受け入れる。相互に敬愛の念をもつ |
| 相互信頼 | 互いが相手の言葉や行動を誠意から発したものと疑うことなく信じあえる |
| 相互援助 | お互いに相手から頼まれれば嫌がらずにやってあげる。相手の困った様子に気づいたら自発的に援助の手を差し伸べる |
| 協力 | みんなの決めた目標に向かって、役割分担をし、協力し合って取り組んでいく。 |
| 切磋琢磨 | 仲間同士がお互いの欠点や誤りを直しあって相互の向上を図り、いい意味でのライバル意識をもってがんばる。 |
| 公正な競争 | 自分自身に備わった諸条件によってルールにのっとり、一生懸命競う |

集団療育活動を計画する際、これらの望ましい人間関係をもった集団（子どもたち）を育成することがねらいとなるでしょうから、上記の**7つの条件のひとつ、もしくは複数**を目標として療育活動を企画するとよいと思います。

また、これらの人間関係をはぐくむ指導の基本的考え方として、以下のような枠組みが提案されています。

【人間関係の在り方についての指導（江川びん成）】

| | |
|-----------------|---|
| 開発的指導 | 一人ひとりの素質や可能性を伸ばす指導。発達課題の習得・達成を目指した指導。望ましい人間関係とはいかなることを言うのかについて正しい理解を図るための指導 |
| 予防的指導 | 問題行動や不適応状態を未然に防ぐことをねらった指導 |
| 治療・矯正的指導 | 現に、何か問題行動や不適応状態に陥っている児童生徒に対して、その解消・改善のための指導 |

おそらく、叶で集団療育を企画する際は、上記のうち、**開発的指導**が主な枠組みになると考えられます。そして、それぞれの児童の特性や現状に合わせ、**予防的指導**や**治療・矯正的指導**が組み合わされるのではないのでしょうか。つまり、**集団療育の基本的な活動の流れは、開発的指導の観点から作成され、備考欄での配慮点として、予防的指導の観点から、そして、なにか、療育中に問題が発生した場合には、治療・矯正的指導の観点からスタッフがかわるといった具合に使い分けしていくとよい**と思います。